短歌（二十）

宇佐美には温泉プールがありまして
　老々男女はクロール泳ぐ

散り敷いた金木犀の花びらの
　重さは二キロ、四方に漂う

寝室の窓の向こうの青空は
　切り取られている腰の痛みに

鈴虫は朝まで鳴くのが仕事かな
　忙しいでしょう、秋は短い

三時には目が覚めていてラジオ聞く
　投稿マニアの身辺情報

下田　明美

父や母、親友たちが居た頃は
　ただそれだけで賑やかだった

思い出は遠くなりけりリビングで
　晩酌始めた一人の女（おんな）

幽霊が居るとは思っていないのに
　夜のトイレはどうして怖い

雷（かみなり）は峠辺りに落ちたのか
　窓の硝子ビリビリと鳴る

立冬になれば散りしく山茶花の
　花びらかなし枯草の上

裏庭のナンテン赤い実をつけて
　　ガスボンベを誘惑している

二十年も咲き続けた赤牡丹
　　猛暑の所為(せい)で枯れてしまった

来迎(らいごう)は、災害の元凶(もと)と嫌われた
　　宇佐美観音　地元に馴染む

ミルシート、報告書まで改竄し
　　そんなに欲しいか、お金あるのに

むかごの実、拾って見れば懐かしき
　　五月に咲いてたつぶつぶの花

キンカンを鳥と争い収穫す
　　実は私(わたくし)がジャムにするのよ